

特別支援教育を基盤にした学校づくりの実践研究

～ 広島市立A中学校での取り組みからの考察 ～

Practice Research of School Management based Special Support Education

～ A Consideration from Efforts in A Junior High School ～

森 信 吉

Nobuyoshi MORI

キーワード＝特別支援教育の理念，共感的人間関係，特別支援学級，生徒指導，「困り感」

1 はじめに

現在，特別支援教育において，大きな教育改革が示されている。

平成 19 年 4 月 1 日に発表された文部科学省の通知「特別支援教育の推進について」では，特別支援教育の理念を次のように整理している。「特別支援教育は，障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち，幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し，その持てる力を高め，生活や学習上の困難を改善または克服するため，適切な指導及び必要な支援を行うものである。また，特別支援教育は，これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく，知的な遅れのない発達障害も含めて，特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍するすべての学校において実施されるものである。さらに，特別支援教育は，障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず，障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり，我が国の現在および将来の社会にとって，重要な意味を持っている。」とある。

また，同通知では「校長の責務」として，「校長は特別支援教育実施の責任者として，自らが特別支援教育や障害に関する認識を深めるとともに，リーダーシップを発揮しつつ，体制の整備等を行い，組織として十分に機能するよう教職員を指導することが重要である。」としている。このことは，現行の学習指導要領に反映され，各学校では校内委員会の設置や実態把握，特別支援教育コーディネーターの指名，「個別的教育支援計画」の策定と活用，「個別の指導計画」の作成などを通して，教育の専門性の向上を図ってきている。

一方で，子どもをめぐる現状では，平成 5 年と平成 26 年を比較すると，不登校児童生徒の割合が小学校で 2.3 倍に中学校で 2.2 倍となっていることや学校内での暴力行為の件数が小学校では 8.1 倍，中学校では 2.2 倍となっていること，また，要保護の児童生徒数は 1.7 倍，準要保護の児童生徒は 2.0 倍となっていることなど，教育現場の抱える課題は多い。

本実践研究は，近年の特別支援教育推進の背景を受け，私が，5 年間，広島市立 A 中学校で校長として取り組んできた「特別支援教育を基盤とした学校づくり」の実践と成果を中心に研究をまとめたものである。

校長なら、だれにでも目指したい学校像があり、それに向けて学校づくりを推進していくのが校長の職責であり使命である。その道のりは厳しく苦しいことも事実である。目標とする学校づくりに向けて邁進することで、校長にしか味わえないやりがいや達成感を味わうことができる。

日々の課題解決に追われる中で、予想せぬ事態も起こりうる。しかし、目指すべき学校づくりに向けての取り組みは怠ってはいけない。一步、一步、ほんの少しでも昨日より前に進むという強い信念をもって学校経営にあたらなくてはならない。そこには、生徒の成長、教職員の成長、学校の成長が必ず見えてくる。何年か先のその姿を信じ、それを、今のエネルギーとし、あきらめず、くじけず、あせらず、今できることの着実な取組を展開してもらいたい。

さて、各校長が理想とする目指したい学校とはどんな学校であろうか。各学校には、校訓や学校教育目標が掲げてあり、「自主、敬愛、勤勉」「強くたくましい子供の育成」など、抽象的で総花的に表現されていることがほとんどである。もっと単純明快で誰もがわかりやすい目標を教職員や生徒に示すことが大切ではないかと思う。

私の、理想とする目指すべき学校は、学力が向上し、問題行動が減少し、不登校生徒が減少する学校である。そのような学校になると、教職員の意欲や使命感が高くなり、病休者がいなくなる。そして、部活動でも上位入賞し県大会出場が増えてくる。結果、生徒が誇れる学校となり、地域・保護者から信頼される学校となる。

では、どうすればそのような学校にできるのだろうか。私は、特別支援教育を基盤とした学校づくりをすればそのような学校ができるのではないかと考えた。

それは、一言でいうと「弱者にやさしい社会の創造」である。本当に幸せな社会とは、社会的にハンディを背負った人が幸せだと感じる社会は誰もが幸せであると思う。そんな学級や学校を創ることが校長の使命であると考えた。

そこで特別支援教育の理念とノウハウと生徒指導の3機能をすべての教育活動に取り入れることにした。まずは誰もがわかる授業づくりである。子どもたちが「今日も学校に来てよかった」「今日も学ぶことができた」と実感できる授業である。

そして先生と生徒の信頼関係の構築である。問題行動を減少させ不登校生徒を減少させるには、教員の生徒への指導の在り方や対応の在り方を変えることである。

2 学校の概要

(1) A 中学校の学級数・生徒数（特別支援学級：内数）の推移

年度	22	23	24	25	26
学級数	16 (1)	17 (1)	16 (1)	15 (1)	15 (2)
生徒数	510 (3)	533 (3)	505 (3)	489 (3)	443 (4)

(2) 教職員は、40 名前後で推移していた。

内訳は、教員が 28 ～ 30 名、事務・業務・給食 8 ～ 10 名、非常勤講師が 8 ～ 10 名であった。

(3) 校内組織（主たるもの）

- ① 教務部と生徒指導部の 2 部制（教務主任と生徒指導主事）
- ② 研究主任を教務部の中に位置付ける・・・授業改善の取り組み、小中連携の取り組み
- ③ 特別支援教育コーディネーター・・・特別支援教育委員会の運営

3 研究の目標

学力を向上させ、問題行動と不登校を減少させ、保護者・地域から信頼される学校をつくる

4 研究の仮説

- (1) 特別支援教育の理念やノウハウを教職員が学ぶことで教職員の能力が向上し学校が成長する。
- (2) 特別支援教育の理念は生徒指導の3機能（自己存在感，自己決定，共感的人間関係）を生かした学校づくりに通じるものがある。特別支援教育の理念を基盤として生徒指導の3機能を生かした学校づくりを進めると，学力が向上し，問題行動や不登校が減少する。
- (3) 特別支援教育を視点にした授業づくりを進めていけば，すべての生徒が「わかった，できた」と実感できる授業が創造できる。
- (4) 特別支援教育の理念である「共感し肯定的な指導」をすることで先生と生徒との人間関係はより良好になり問題行動が減少する。
- (5) 生徒と共に創る学校づくりを目指す，生徒が誇りに思える学校ができる。

5 研究の計画と方法

- (1) 研究組織の確立
- (2) 教職員と生徒への目指す学校像，周知徹底（特別支援教育の理念と目指す学校像を明確に知らせる）
 - ① 学校経営計画 ② 全校対象特別支援教育 校長講話
- (3) 実践研究の実施
 - ① 特別支援の考えを取り入れた生徒指導の実践
 - ② わかる授業の創造
 - ア 特別支援の考えを取り入れた授業づくり
 - イ 全教科共通の取り組み（本時の目標，個人思考，ペア，グループ，意見交換，振り返り，まとめ）
 - ウ ベル着から着ベルから3分前学習の実施
 - エ 授業づくりDVDの作成
 - オ 授業研究会の開催（指導主事招聘）
 - ③ 小中連携の取り組みの推進
 - ア 小中連携による共通の授業づくり
 - イ 小中連携による発達段階に応じた生活心得の取り組み
 - ウ 小中共通の育てる子ども像（Aセブン）への取り組み

6 検証方法

- (1) 学校評価アンケート（前期・後期）・・・保護者，生徒，教職員
- (2) 基礎基本定着状況調査

7 検証内容

- (1) 基礎基本定着状況調査で，広島市の平均点を上回る
- (2) 基礎基本定着状況調査で，30%未満を限りなく0にする 基礎基本定着状況調査で，60%以上の達成率を80%以上にする

- (3) 問題行動件数を減らす 不登校生徒を減らす
- (4) 学校生活満足度を 90% 以上にする

8 具体的実践

(1) 研究組織の確立～3つの組織を中心とした研究推進

① 学力向上総合対策協議会（年4回）

- ・ 小中管理職 各校研究主任 各校生徒指導主事
- ・ 小中連携の授業づくりや生徒指導の取り組みについて協議

② 授業研究会（年10回）

- ・ 「わかる楽しさ」「学ぶ楽しさ」を実感できる授業づくりをテーマに研究主任を中心に授業研究会

③ 特別支援委員会

- ・ 特別支援教育コーディネーター 管理職 学年主任 生徒指導主事
- ・ 特別に配慮のいる生徒への具体的な指導について協議

(2) 教職員と生徒への目指す学校像の明示

① めざす学校像，学校経営計画の説明

年度当初に，校長より学校経営計画を全教職員に説明する。図1のような文書を配布して説明する。

配布文書は年度によって若干の違いはある。

図1「学校経営について」（平成24年度）

すでに昨年度の段階で，何回か職員の皆様方でご検討いただきながら本年度の学校経営計画を作成しました。「生きる力と心豊かな人間性の育成」という学校教育目標の達成を目指して，具体的な行動目標を実践していきたいと思っています。

これまでの取り組みにより，問題行動が激減し，授業規律の第一段階がほぼ徹底でき，生徒の日常的な挨拶も向上してきています。そのような成果から地域の方や保護者より信頼される学校になりつつあります。学校評価アンケートや自由記述の内容，また，地域の会合での話や，ボランティア活動などから中学生に対する評判が非常に良くなっているのを感じております。

本年度は，学校の落ち着きを維持することと更なる前進を目指したいと思います。授業規律の第二段階に向けての取り組みや，低学力の克服と学力の向上，さらに挨拶が飛び交う学校を目指したいと思います。また，集団の規律として集合したときには無言で集合できる集団を目指したいと思います。

先生方をお願いしたいのは，授業を大切にすることです。授業を大切にするという基本的なことは，チャイムが鳴る前に教師が教室にいるということです。それだけで生徒の反応は違ってきます。是非先生方にはチャイムが鳴ったときには教室にいるということを一年間やり続けていただきたい。できれば3分前には教室にるようにしていただきたい。全員がそれを実行することで学校がすごく良くなってきました。これまでの取り組みを見ていてその成果を強く感じております。そして，チャイムと同時に終了し，しばらくは教室にいて生徒の様子を見守っていただければと思います。

私は，授業に遅れたときには，生徒に謝っていました。「申し訳なかった，君達の学習する権利を保障できなかった。こういう理由で遅れてしまった。」先生が授業を大切にしているということを生徒に感じさせることも大切だと思います。

そして，生徒指導の3機能を授業に取り入れるということです。「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」を意図的に仕組んでいく。日常の教育活動の中心である各教科の授業場面において学校全体の共通の考えや取組を仕組むということです。「自己決定の場を与える」とは，生徒が発問に興味関心を持ち，な

ぜ、どうして、考えてみよう、という授業をつくることです。具体的には、一人で考える時間、班で考える時間、みんなで考える時間、自分で考える時間や、友達の考えを聞く時間などを授業の中に意図的に仕組むことなどです。また、選択肢をもうけて選ばせることで自己決定の場を与えこともできます。

「自己存在感」は生徒の名前を目を見て呼ぶ、さらに授業では「さん、君」をつけることで自分が大切にされているということを感じます。間違った応答も大切に、そんな考え方もあるなあ、違った考え方を認めることです。また、全員が手を上げる場面や、発言する場面を何回か作る。グループ読みによりすべての生徒が読みに参加する。とか、分かった人はグー、分からない人はチョキというように、また、先生の後について大きな声で読んで下さい、など、参加させる場面は何度か作れると思います。何も持ってこない生徒や忘れた生徒がいることも考えて予備のプリントを何枚か用意しておくことも考えられます。

「共感的人間関係は」良い発言にはみんなで拍手をすとか、良いことを見つけてほめる、また、お互いが教え合う場面を仕組むことなどです。マイナス発言や人を馬鹿にしたような場面では、適切に指導を繰り返すことが必要です。それを指導する教師の姿を生徒は見ています。これらのことは、授業以外でも取り組めることです。要はプロとして生徒指導の3機能を意識して指導にあたる必要があります。

特別支援教育のノウハウを授業に活かしてほしいと思います。例えば、自己決定では選択肢をAかBの二つにすることで比較的簡単に自己決定ができます。また、限りなくAに近いBというように選択しやすくすることもできます。

言ったことはすぐに忘れる、いわゆる短期記憶ができません。黒板や電子黒板などに書くことで、何度も繰り返し読むことで理解を支援できます。視覚に訴えることが大切です。朝会があるときなども、「何時までにグラウンドに集合、代議員は整列の指導、無言集合」と黒板や電子黒板に書いておくと指導が徹底しやすくなります。前日に伝えたとしても忘れていたことが多々あります。指導が入ると集合もよくなる。それを褒めることで自己肯定感が高まる、という良い循環となります。

先を見通す力が弱い生徒がいます。明日は何かあるのかが理解することができない。そこで一ヶ月の予定、週の予定、明日の予定、そして本日の予定が教室の中でわかるような掲示が必要となります。

また、急な変化についていけない生徒がいます。毎日、同じパターンで生活することで気持ちが安定し安心できます。私たちも同じことです。基本的生活習慣の確立です。授業や板書も一緒です。導入と最後は同じパターンにすることで生徒は落ち着きます。この先生はこのようにノートをとればいいんだということがわかれば安心します。できれば板書を写すのに時間がかかる生徒がいますので、書いてすぐには消さない、授業終了後に板書をみれば一時間を振り返ることができるような板書計画をたてていただければと思います。

生徒たちの中には自己肯定感が少ない生徒がいます。発達障害の生徒たちは、どちらかというところ「みんなと同じようにできない」という中で育ってきています。否定的な言葉にとっても敏感です。私たち教師は肯定的な表現で生徒を指導して頂きたいと思います。ちなみに本校のグラウンドは広島市で一番の校庭の広さです。肯定的に指導していきましょう。

次に、わかる授業づくりです。これは教科の特性もあり、先生方の力量も大いに影響するところです。中学生の悩みの一番は「勉強について」です。

興味関心を大切に、生徒の知的な好奇心を揺さぶる。先生方の授業を生徒が楽しみにするようになってほしいと思います。授業がわかると生徒は楽しいと思います。「そうだったのか、なるほどなあ」と感じる授業、今日も学校に来て良かったと生徒が感じる授業。授業力を身につけることで生徒指導も楽になります。授業を大切に授業力のある先生を生徒は尊敬します。

豊かな心では、挨拶をする学校を目指したいと思っています。「笑顔で会釈であいさつ」のできる生徒の育成、挨拶のいい学校は、必ずいい学校となります。是非、教職員から見本となっただき、教職員同士の挨拶、生徒への挨拶、来客者への挨拶、特に来客者に対しては私たちは社会人としての対応をしなければいけません。会社のお客様に対する対応と同じことです。その日常の社会人としての当然の対応が何かあったときでも学校への応援となってくれるのです。先生方がよく挨拶をするから生徒もよく挨拶をしますね、というように、生徒の成長は先生方の指導のおかげであるというようにプラス思考で学校を見て頂けるようになります。そうすることで保護者や地域の信頼や協力を得ることになり生徒指導上の課題も解決しやすくなります。また、不審者対応にも挨拶は有効です。挨拶をして顔を見られたら悪いことはできません。生徒の安全を守るためにも挨拶は大切です。生徒たちにも、先生方や来客者、また生徒同士でも挨拶をするようにしっかりとって頂ければと思います。

「百回会ったら百回挨拶」「いつでも どこでも だれにでも」の気持ちで廊下などですれ違っても子供たちに「お

である。目が不自由でも点字ブロックがある。信号が音で察知できる。また、そのように施設がととのっていないかとしても、何かあれば知らない人でもすぐに手助けをしてくれる。このような社会が理想の社会ではないかと思います。

私たちは、私達が年をとったり、障害を負っても幸せに生きていける社会を目指さなくてはいけないと思います。自分が不自由な身体になった時のためにも、みんなで助け合うことのできる社会、みんなと同じようにできなくても、幸せを感じる社会。支えあい応援できる社会をつくらなくてはいけません。それが思いやりのある社会です。「絆」のある社会だと思います。

クラスには、運動が得意な人もいれば苦手な人もいます。自分の気持ちをうまく伝える人もいれば苦手な人もいます。数学が得意な人もいれば、苦手な人もいます。片づけが早い人もいれば、遅い人もいます。歌の得意な人もいれば苦手な人もいます。みんなと同じようにしようと思ってもできないことがたくさんあります。でも一生懸命にみんなと頑張りたいという気持ちをみんな持っています。

できないことを非難するのではなく、できることを認め、支えてあげることのできる人になって下さい。これを「思いやりの心を大切にす優しい力」といいます。中学生の君達に最も身に付けてほしい力です。

皆さんは、ブータンの国王が来日されたことを知っていますか。ブータンは国民総幸福度がとても高い国です。ブータンはけっして金銭的に物質的に豊かな国ではありませんが、精神的な豊かさを幸福と考え、お互いの違いを認め合い、思いやり支え合う国づくりを進めてきたのです。

一年前の、東日本大震災では、あっという間にすべての物が流されてしまいました。しかし、人々の生きる希望や支え合う思いやりの心は流されることはありませんでした。

私は、東日本大震災から、私たちは弱さや、苦しみや、悩みを出し合いながら生きていくことが大切ではないかということを知りました。弱さと弱さを出し合うことが優しさにつながるのではないのでしょうか。

さて、本校には、特別支援学級として「たんぼぼ学級」があります。このたんぼぼ学級と君達のクラスの両方で勉強をする友達がいます。人はそれぞれにあったよく分かる勉強のやり方があります。たんぼぼ学級では一人一人のお友達が自分にあったやり方で勉強をします。でも、教科や行事によってはクラスや学年という大きな集団の中で勉強をします。みんなと一緒にできる学習とそうでない学習があるので知っておいて下さい。

私は、たんぼぼ学級の友達が皆さんと知り合い、学びあう機会を大切にしたいと思っています。

一緒に学習する機会があると、人間関係の幅も広がります。学習したり遊んだりしているうちに、自然に付き合い方も分かってくる友達もいます。これらのことは、世の中のいろんな人と付き合おうとする気持ちの基です。

一緒に学習したり遊んだりする中で、良いところを見つけ、お互いの人格を認めあって、難しいところは支えあっていこうという、お互いを思いやる気持ちを育ててください。そういった、暖かい雰囲気の中でよりよい人間関係を築いていけるよう頑張ってください。

このことはたんぼぼ学級の友達だけではなく、クラスの友達全員に伝えることです。

皆さんが、笑顔で会釈で挨拶ができ、思いやりの心を持ち、決まりを守り授業を大切にすばらしい生徒になってほしいと思っています。

(3) 特別支援教育の理念を生かした具体的な指導理念

① 基本的な理念は子どもに寄り添う（共感し肯定的に指導）

- どんな子どもでもわかってほしいという強い思いを持っている
- 問題行動は子どもからのメッセージであり、しっかり受け止めることが必要
- 問題行動の意味を考え、子どもを尊重した対応を考えていくことが必要
 - ・ 受け取ること ・ 理解すること ・ 思いを伝えること ・ 共に考えること
 - ・ 認めること

◎ このような人がいたら、子どもは肯定的な気持ちになり、その体験が子どもを成長させる。

② 具体的な指導の配慮点

ア、声かけの工夫

単語をきって、明瞭に、具体的な指示、一度に一つの指示
ファジーな言い回しはさける（具体的に声をかける） 丁寧な言葉で（命令的でない）
肯定的な表現で（否定を肯定に言い換える）

イ、視覚支援 ウ、見通しを立てる エ、予定を伝える

オ、達成感を味わえるような工夫（成功するような配慮や支援）

課題の量を減らす 適度な休憩 子どもの集中力（様子を見て残りを次回に）

● できたことを褒めて、できないことを叱らない

（４） 特別支援教育を基盤にした授業づくり

- ① 通常の学級で「困り感」をもって学んでいる子どもがいる。この子供たちを救うために、まず私たちがしなければいけないことは、何よりも授業づくりである。
- ② 特別な支援の必要な生徒への教育的支援は、全ての生徒への支援に役立つ。特別支援教育に視点を当てた授業は、全ての生徒が主体的に学習することができる。全ての生徒が、「わかる喜び」「学ぶ楽しさ」を味わうことができる。
- ③ 授業規律など、学校生活の枠組みをしっかりと示すこと（軸がぶれないこと）
- ④ 周りでがんばっている生徒をしっかりとほめてやる。クラスの中でのモデルがなくなってしまうと、何が正しいかわからなくなる。
- ⑤ 学びと育ちを保障する
できた、わかったの体験をしっかりと積み上げること。
- ⑥ 個別の指導と集団での指導との両輪で。
個別での指導と集団での指導とは相補的な関係にある。一斉指導で行き届かない面を個別の関わりで補う。一方で個別的なケアを厚くするばかりだと、かえって生徒を教室から遠ざけてしまう。
- ⑦ 子どもが集団の中で育つ。個別の指導だけではうまくいかない。
一人の生徒に手をかけすぎて集団が崩壊していくというケースもある。生徒間の関わりを大切にする集団への指導と、個別の指導とのバランスが大切。
● わかりやすい授業と、仲間の中で生き生きとできる集団をつくることが中学教育には欠かせない。

*具体的な指導の手立て（例）「その子に注意せず、全体で同じことをさせる」

いつも同じ生徒ばかりを注意していると、学級の雰囲気が悪くなったり、注意ばかりされる生徒が衝動的になったりすることがある。そんな時に、「その子に注意せず、全体で同じことをさせるというテクニックもあります。例えば、「全員で深呼吸」「みんなで大きな声で言ってみよう」「目をつぶって考えてみよう」など。

集中力は時間がたつと落ちてくる。課題のある生徒だけでなく、学級全体の落ちてきた集中力をリセットできる。

（５） 具体的な授業づくり

① 授業規律の確立

まずは授業規律。規律は学校生活に安心感を保障するためにある。数分前から授業の準備をして待つ。

教室は常に整理整頓する。形がはっきりしていると子どもは安心する。

② 見通しを持たせる工夫

- ① チャイムと同時に始めて、チャイムと同時に終わる（見通し、心理的安定）
- ② 本時の目標の明確化（見通し、目的理解、心理的安定）
- ③ 授業の流れを示す（見通し、目的理解、心理的安定）
- ④ 授業の流れをパターン化する（見通し、心理的安定）

- ③ 自分で考える時間や作業時間の確保
- ④ ペアやグループでの協同学習の時間・・・生徒同士の学び、同世代の仲間が学び合う
- ⑤ まとめ・振り返りの時間・・・何を学習したかが確認できる
- ⑥ アクティブラーニングと特別支援教育の理念（学び合いをどう深めるか）

授業とは、本時の目標の課題を間にはさんで子ども同士が学びあう場である

※ 学ぶ値打ちのある課題（本時の目標）を媒介にして子どもを繋ぐ。子ども同士が関わり学ぶことで個の学びに繋がっていく。

※ 魅力的な課題があれば、子どもたちは意欲を示し、子ども同士も繋がっていく。

※ 「学ぶ値打ちのある課題」を媒介にして子供同士がつながり、聴きあう。他者の言葉に耳を傾け、仲間と対話することによって、自らの学びは深まる。

※ 特別に支援の必要な生徒は、休み時間などの時間帯よりも、授業のように形式のしっかりした場面の方が、人との関わりがもちやすい。授業は、教科の内容や教材を媒体として周りの生徒との関係を持つことができる。支援の必要な生徒にとってはかけがいのない時間である。

(6) 子ども同士の学び合いを深める工夫

① 個人で考える時間の設定

ペア、班活動に移る前には、個人で考える時間が必要。それがないと、ペアや班にしたときに、早くできた子どもの意見ばかりが通ってしまう。

② 班での役割を決める

③ 話し合いが始まらないペアや班にかかわるタイミング

一分ぐらい様子を見て、声をかける。動きの出にくいペアや班から先に声をかける。

④ 話が途中で終わってしまうペアや班にかかわるタイミング

話が途切れているときには、あまり間をあけずに様子を見に行く。各自が一通り発言したものの、そのあと何を話したらいいのかわからずに止まってしまう。あるいは、すでに課題が解決していることもある。そういう場合は、どんなことを話したのかを聞いてみる。

⑤ 仲間とつながっていない子どもにかかわるタイミング

仲間とつながっていない子どもがいる。気が付いたら、その子の様子を見取る。仲間についていけない時には、少ししゃべらしてみる。分かっていることを語らせて、仲間にも聞いてもらう。

⑥ ペア、班活動から全体に返すタイミング、全体からペア、班活動に返すタイミング

約3分の2が終了・・・さっき話し合ったところまででいいので発表してください。

9 A 中の実践と成果

(1) 学校像の確立

まずは、3年間という長いスパンでの学校改革を目標に取り組んだ。その年ごとの現状を把握、分析し、課題を整理し、対応策を考えた。生徒の実態を把握し、現状でできることから取り組むこととした。まず、学習規律の第一段階の徹底に取り組んだ。特別支援教育の理念を基本とし、学校経営のバックボーンとした。それは、社会的弱者が幸せだと感じる社会こそ誰もが幸せであるという考えである。ハンディキャップを負った生徒、学習につまずいている生徒、みんなと同じようにしたくてもできない生徒の気持ちに寄り添って教育をするという考え方である。

勉強の嫌いな生徒はたくさんいるが、「自分が成長することを望まない生徒は一人もいない」の強い信念のもと、わかる授業づくり、共感する人間関係づくりに努めるとともに、あらゆる場面を通じて校長の教育理念を教職員に浸透するように心がけた。基本は「生徒一人一人を愛し大切に育てる」ということである。

また、学校は生徒と共に創っていくものである。生徒同士の呼びかけは教師の一言よりも大きな教育効果をあげることがある。生徒のリーダーをしっかりと育て、生徒と共に学校を創っていくという考えのもと学校経営を推進した。

学校教育目標を「生きる力とこころ豊かな人間性の育成」とし、研究主題を「授業規律の確立と、わかる喜び、学ぶ楽しさを実感できる授業の創造」のもと、目標達成に向けて校長のリーダーシップのもと全教職員がベクトルを一つにして取り組んだ。

こうした取り組みの中で、3年後には学力が向上し、問題行動が減少し、県下でも目標とされる学校となった。

平成26年11月6日には学力向上総合対策事業公開研究会を開催し、県教委、市教委の臨席のもと県内各地はもちろんのこと全国より多くの先生方に参加いただき授業の様子や本校の取り組みを見ていただいた。平成27年1月10日には、広島県教育委員会主催の「学力向上のための実践交流会」でこれらの成果を約2000人の教職員の前で研究主任が発表することができた。

(2) 学力の向上を目指しての授業改善と学習習慣の確立。

まず、基本的な授業規律の取り組みから始めた。1年目は「ベル着」、これはベルが鳴ったら席に着くというものであった。2年目は「着ベル」、これは席についてベルを聞くというものである。3年目からは、広島県教育委員会の「学力向上総合対策事業」の指定校を受けることができ、さらなる学力の向上と生徒指導の充実に取り組むことができた。このころから、3分前着席を呼びかけ、チャイムが鳴る3分前にはすべての生徒が授業準備をして予習をするという段階になった。先生も、当然3分前には教室に行くことが当たり前となった。このようにその時の現状を分析し、一歩ずつ取り組みを進めていった。

授業は「本時の目標」を提示することをすべての教員が取り組んだ。また「本時の目標」も生徒が「何を学習する」のかがわかり「何を学習したか」を振り返ることができるものになるように目標に工夫がみられるようになってきた。

授業は、個人思考の時間、ペア思考の時間、グループ思考の時間、振り返りの時間と一時間の中に共同学習を取り入れ、生徒同士が関わりを持てるように仕組んでいった。

家庭学習の定着にも取り組んだ。基礎基本定着状況調査や全国学力調査からみて、家庭学習の時間に大きな差があった。どうすれば家庭学習の時間を増やし、児童生徒が机に向かうのが習慣化できるかを考え、仮説を立て検証した。家に帰って、すぐに机に向かう習慣がつけば、夕食後でも机に向かうのがおっくうでなくなるのではないかと仮説を立てた。そこで、実際に

家に帰ったらすぐに机に向かうように指導したクラスとそうでないクラスを比較して検証したら、家庭学習に差がみられた。そのことを生徒会執行部に「本校の生徒の課題として家庭学習の短いのがあげられる、仮説を立てて検証したらこのような結果となった、生徒会として「家庭学習の定着に取り組んでもらいたい」と問題提起した。生徒会長が中心になり、全校生徒に呼びかけ、「家に着いたらデスクに着くんデスク」という標語ができあがった。また、自主学習ノートへの取り組みとして「つくくんノート」も定着していった。これらの取り組みは小学校とも連携しておこなった。

(3) 生徒指導の充実

特別支援教育の理念とノウハウ、そして生徒指導の3機能を生かした指導を、すべての学校教育で教職員が意識できるようになった。「共感するけど同意せず」を合言葉に肯定的で共感的な指導に心がけた。生徒と先生の関係が深い愛情と信頼関係で結ばれてきた。問題行動が減少し突出した生徒は一人もいなくなった。

小学校との連携の充実にも取り組み、目標とする児童生徒像を「Aセブン」として、7つの行動目標を掲げた。小中9年間で児童生徒を育てるという意識が教職員の間で芽生えた。共通の授業づくりや、生徒指導のきまりなどに連携して取り組んだ。

(4) 部活動の充実

中学校教育で大切な一翼を担っているのは部活動である。部活動の意義を教職員に徹底した。特に、部活動を通しての人間教育をお願いした。部活動の顧問は大変な負担でもあるが、やりがいもある。部活動中のわずかな時間でも顧問として顔を出すようにお願いをした。

A中での5年間で、野球部は市大会準優勝3回、優勝1回、県大会優勝1回（中国大会出場）、剣道部は男子団体市大会準優勝1回、個人中国大会出場1回、女子剣道部全国大会出場2回、バドミントン市大会優勝1回、個人全国大会出場、サッカー部県大会3位など県レベルでの成績がみられた。

その他の部活動も、区大会ではほとんどのクラブが上位入賞を果たした。吹奏楽はB部門4年連続金賞を受賞した。

現在、プロ野球のオリックスで活躍している山岡投手は、この時の、軟式野球部で活躍していた生徒である。

10 検証結果

(1) 基礎基本定着状況調査で、広島市の平均点を上回る

※ 基礎基本定着状況調査の学力の推移

年度	3科（国・数・英）合計		差
	A中	広島市	
22	204.8	212.2	- 7.4
23	205.1	212.5	- 7.4
24	222.4	222.6	- 0.2
25	220.1	201.7	+ 18.4
26	218.7	200.7	+ 17.4

① 目標とする、広島市の平均を大きく上回ることができた。

② 22年度は、生徒を見取る授業研究、22年度から授業規律の確立と特別支援教育のノウハウと生徒指導の3機能を生かした授業づくり、23年度から小中連携の取り組み、24年度か

ら学力向上総合対策のもと授業改善・生徒指導のさらなる取り組みを進めた。

- (2) 基礎基本定着状況調査で、30%未満を限りなく0にする。基礎基本定着状況調査で、60%以上の達成率を80%以上にする

※ 基礎基本定着状況調査 30%未満 60%以上の各教科の推移

30%未満の割合					60%以上の割合				
年度	国	数	英	平均	年度	国	数	英	平均
21	4.0	8.0	12.0	8.0	21	69.3	62.7	41.3	57.6
22	2.2	3.9	8.4	4.8	22	72.1	69.8	60.3	67.3
23	2.6	6.6	3.9	4.3	23	69.1	66.4	66.4	67.3
24	1.1	4.0	4.6	3.2	24	82.8	75.9	73.4	77.3
25	2.6	2.6	2.6	2.6	25	77.3	79.9	83.6	80.3
26	0	2.8	3.5	2.1	26	79.6	78.9	82.4	80.3

- ① 30%未満の割合を減らすことはできたが、0は国語だけが達成した。クラスに1～2名は学習内容を理解できない生徒がいる。この子たちが理解できる授業づくりが必要である。
- ② 学習内容を60%以上理解している生徒が80%以上を達成した。

- (3) 問題行動件数を減らす 不登校生徒を減らす

※ 問題行動の推移 不登校生徒数の推移

問題行動（件数）					不登校（人数）		
年度	1年	2年	3年	計	年度	不登校者数	全校生徒数
20	27	27	22	76	20	11	500
21	42	55	48	148	21	18	519
22	19	85	92	196	22	16	510
23	48	6	36	90	23	16	533
24	2	13	2	17	24	10	505
25	3	2	7	12	25	5	489

- ① 20年度入学者は、学年があがるに従い問題行動件数が増加している。
- ② 21年度入学者は、3年生になり減少した。
- ③ 22年度入学者は、学年があがるにつれて問題行動が減少し3年生の時には学校全体をリードし下級生の見本となった。
- ④ 23年度入学者は、入学時は男子が幼稚で多くの問題行動が見られたが、学年があがるにいい落ち着いてきた。野球部・剣道部が県大会優勝を果たした。
- ⑤ 24年度から、問題行動は激減し、突出した生徒はいなくなった。不登校生徒も減少してきた。
- ⑥ 26年度は、さらに問題行動、不登校生と共に減少し、実践の成果を感じることができた。
- 26年度は、私の退職年度であり、数値をまとめることができなかった。
- (4) 学校生活満足度を90%以上にする

※ 基礎基本定着状況調査の生活アンケートの推移

年度	学校に行くのは楽しいですか (%)	家で1時間以上勉強していますか (%)	学校や社会のルールを守っていますか (%)	近所の人や家の人に挨拶をしていますか (%)	毎朝朝食を食べていますか (%)
22	84.9	29.0	87.7	88.3	90.5
23	85.2	29.6	88.2	85.5	94.7
24	86.8	35.6	90.8	90.2	96.0
25	88.3	50.6	89.8	92.9	98.7
26	92.3	43.0	93.7	96.5	95.8

① 学校に行くのが楽しいという生徒が90%をこえた。

11 成果と今後の課題

この5年間で毎年、学力は向上し、問題行動は激減した。入学してくる学年に関係なく、学校は右肩上がりに、着実に成長した。

県内のみならず、関東・大阪・中四国・九州など全国から多くの視察があった。生徒の様子や教職員の様子をみて、本校の取組を是非とも参考にしたいということであった。

このように、学校が成長することで、地域保護者からの厚い信頼をえることができた。また、県教育委員会、市教育委員会からも高く評価された。

特別支援教育を基盤とした学校づくりは、生徒の成長を促し、学力を向上させ、問題行動を無くし、不登校生徒を減少させることが実証された。

教職員も、指導したことが成果としてあらわれ、職務に意欲的に専念した。先生が、指導する、生徒が応える、成果が出る。すかさずほめる、そして、先生も生徒もまたやる気になる、という教育の好循環が生まれた。

特筆すべきは、赴任最初の年は2名の病休者がいたが、その後の4年間は、1人も病休、休職者がいなかったことである。各学年4クラス～5クラス規模の学校で、1か月以上休んだ教職員が4年間1人もいないというのは全国でも珍しいのではなかろうか。

教職員を対象とした、ストレスチェックにおいても、仕事量が多いと感じているが、仕事に対するやりがい、管理職の支援、協働性などは大変高い数値を示した。その数値は広島市でもトップクラスであった。

今後の課題としては、管理職をはじめとする教職員が特別支援教育の重要性や理念をしっかりと理解し、その指導力を身につけることである。特別支援教育を視点にして教育を科学していく力が求められていると思う。日々の実践を特別支援教育の観点から理論化することで、その教育効果を実感できるのではないかと思う。そのためには当然、特別支援教育の研修が必要である。研修と実践を通して、管理職をはじめとする教職員は、子どもの困り感を見取ることができる人権感覚を磨き、授業力と生徒指導能力を向上させなくてはならない。

参考文献

文部科学省「特別支援教育の推進について」（通知）平成19年

文部科学省「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（答申）」平成27年

太田正孝『発達障害』日本評論社 2006年

文部科学省『小中学校におけるLD、ADHD、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備の

ためのガイドライン』東洋館出版社 2004 年
繁多進『乳幼児発達心理学』福村出版 2006 年
田中康雄『これでわかる発達障害』成美堂出版 2014 年
田中康雄『軽度発達障害』金剛出版 2008 年
田中康雄『支援から共生への道』慶応義塾大学出版 2006 年
中田洋二郎『軽度発達障害の理解と対応』大月出版 2006 年
内山登紀夫『発達障害の診断と支援』岩崎学術出版社 2013 年
玉永公子『発達障害の謎』論総社 2013 年
大前暁政『通常学級の特別支援教育』黎明書房 2012 年
中村忠雄『はじめての障害児教育』明治図書 1998 年
杉江修治『協同学習入門』ナカニシヤ出版 2011 年
加藤辰雄『誰でも成功する板書のしかた・ノート指導』学陽書房 2007 年
野中信行・横藤雅人『必ずクラスがまとまる教師の成功術』学陽書房 2011 年
野口芳宏『教師のための話す作法』学陽書房 2011 年
山田洋一『教師に元気を贈る 56 の言葉』黎明書房 2012 年
岸本裕史『学力を伸ばす 3 つのひけつ』清風堂書店 1991 年
小林朝夫『フィンランド式頭のいい子が育つ 20 のルール』青春出版社 2010 年
蔭山英男『学力再生』小学館 2003 年
蔭山英男『学力低下を克服する本』文藝春秋 2003 年
齋藤孝『勉強ギライが治る本』宝島社 2007 年
中室牧子『学力の経済学』ディスカバリー・トゥテンティワン 2015 年
吉田順『誰でも成功する中学生の叱り方のキーポイント』学陽書房 2011 年
佐藤暁『どの子もこぼれ落とさない授業づくり 45』岩崎学術出版社 2012 年
岩本裕史『確実に学力をつける家庭学習法』企画室 1994 年
吉田たかよし『最強の勉強法』PHP 研究所 2002 年
寺崎千秋『校長力を高める 101 の心得と実践』教育研究開発所 2006 年